

生まれ変わる耕作放棄地

ここでは、農業生産法人((有)ドリームファームスズカ)と対策協議会が協働で、栄地区の耕作放棄地を再生させた事例を紹介します。

◎再生までの流れ

- 1 栄地区農業委員会が対策協議会へ相談
- 2 対策協議会がドリームファームスズカへ相談
- 3 栄地区の農業者、ドリームファームスズカ、対策協議会などで調整

4 耕作放棄地再生へ着手



…農業生産法人 (有)ドリームファームスズカ 専務取締役 杉本二良さんにお話を伺いました。



杉本二良さん

◎お互い得する関係

当時、ホールクロップという飼料用稲を作っていました。ホールクロップは、牛にとって栄養価の高い飼料となるので、需要があったからです。そんな時に、対策協議会から、栄地区の相談を受けました。耕作放棄地で困る住民とホ

ールクロップを生産したい私たち。では、その耕作放棄地を利用して、ホールクロップを作ろうとなりました。お互いの需要と供給が一致し、耕作放棄地の再生を請け負うことに決めた瞬間でした。

住民にとっては、耕作放棄地が解消される。私たちにとっては、生産性の高い作物が作れ、稲作の

農閑期に仕事もできる。お互いが利益を得られる関係になれたと思います。

◎地域への還元

栄地区以外の耕作放棄地では、ソバも作っています。ソバは生産も簡単なほうで、畑にも根付きやすいからです。ただ、それだけでなく、ソバの花は畑一面に白く美しく咲き、地域にすばらしい景観をもたらしてくれます。また、鈴鹿の土地を愛する心を持つきっかけになってもらえればと小学校でソバの種まきから、収穫、ソバ打ちを体験してもらっています。

耕作放棄地を再生するのは簡単ではありません。利益第一主義で考えれば、進んで耕作放棄地で農業はできません。しかし、地域への還元、花と緑の魅力を伝えたいという思いが原動力になっています。

耕作放棄地はとても難しい問題ですが、企業のもつ機動力で耕作放棄地を解消するのも一つの方法ではないかと思っています。



杉本二良さん手作りの耕作放棄地産ソバ (すごくいい香りです)

●鈴鹿市耕作放棄地対策 有識者検討委員会

対策協議会では、市の総力を挙げて耕作放棄地を解消するために、市民、農業者、団体、企業、教育機関、福祉施設などをメンバーとした「鈴鹿市耕作放棄地対策 有識者検討委員会」を平成22年3月に発足させました。

この委員会では、「農業で幸せに生きる」をテーマとし、地域振興まで踏み込んだ、市民・観光農園プロジェクト、地域八百屋プロジェクト、福祉・教育農園プロジェクト、NPO法人の設立などの提案がなされました。これは、全国で初めてとなる取り組みでした。

ふるさとの土地を守る

地域の活性化や、ふるさとの土地を荒廃させないために、農業でまちづくりに挑む人々があります。ここでは、そんな人々の取り組みを紹介します。

◆椿の地域と農業を考える会

○椿を元気に

椿地区ではお茶畑の耕作放棄地が増えて困っています。そんな椿地区を農業で元気にしたいという思いから、お茶農家を中心とした認定農業者25人がメンバーとなって、2年前に会が発足しました。

会では、2カ月に1回「農業ビジネス倶楽部」という勉強会を開き、「椿大神社」という地域資源を生かし、農業を使った門前町ビジネスを模索しています。

椿縁結び市

- とき** 11月12日(土)、13日(日)9時～16時
ところ 椿大神社駐車場(山本町1871番地)
内容 椿地区の農産物・加工品の直売、鈴鹿グルメ(茶うどん、鈴鹿おこげめん)、鈴鹿市物産協会の出店など
問合せ 椿の地域と農業を考える会
 (矢田 ☎090-2680-3536)



○地域全員で農地を守る

会を作ったことで、情報交換の場になり、各農家が協力しあって地域を盛り上げていこうという気運が生まれました。

最近も、県外から就農を希望して移住してきた若者に勉強会へ参加してもらいました。こういった会があると地域へ溶け込みやすくなるのでしょうか。

一人では農地は守れません。今ある農業を地域全員で守ることで、地域の活性化にもつながり、農地の荒廃を防げるのではないかと思います。

◆稲生地区地域づくり協議会

○文化と水が自慢の稲生の里

稲生に住んでよかったと思えるような「ふるさと稲生」をめざして、稲生を元気にしたいと願う地域住民が集まり、平成19年に結成しました。

稲生地区は、歴史と農耕文化に富んだ里です。古くから稲作が盛んであったため「稲生」と名付けられたという説もあるほど、おいしいお米がとれます。

○純米吟醸「稲生おんど」



純米吟醸「稲生おんど」

「米どころ稲生」をアピールするために、何ができるかを皆で考えました。そこで、ふるさとの農地を愛する心を高めてもらいたいという思いから、稲生の米を使って日本酒を作ろうということになりました。はじめは苦労の連続でしたが、清水醸造さんの協力のもと、



地域が一体となって、見事に「稲生おんど」を完成させました。

私たちは、日本酒づくりだけでなく、50年余り途絶えていた「虫送り」の再現、稲生音頭平成版CDの作成やガイドマップの作成など稲生の文化の保存・発展活動にも取り組んでいます。

自分たちのふるさとの良さを知ること、それを大切にしたいという気持ちが生まれます。その気持ちが、ふるさとの土地を荒廃させないことにもつながるのではないかと思います。